

倉橋惣三「保育法」余聞 (4)

幼児の表現論(一)

—— 自発性とその誘導 ——

土屋 とく

本稿は、『倉橋惣三「保育法」講義録』（フレールベル館）の補足説明として、本誌第九十二卷九号・十一号 第九十三卷一号に三回にわたり掲載されたものの続編である。

倉橋先生の著作等の業績中「幼児の表現論」と銘する。

打って単独に著されたものは見当たらない。しかし子どもの表現に就いての見解は、多数の著述や語り口の中に、かなり明確に述べられており、それらから抽出された「表現論」を紡いでみることは出来そうである。

一、育ちの自発性と表現

先生の保育理念の根底にあるものは、一貫して《育

ちゆく いのち」がもつ力の素晴らしさと、幼い芽の中に潜在する可能性を信じ、花開いていくことに驚きつつ、且つ健やかに正しく伸びることを祈る姿であった。

そして子どもを大切に思うが故に、育てる側に対して多くの期待と責任のありようを繰り返し繰り返し説いていったのである。

「教育は育つものに対する信仰である」「自発力は生命的なのである」と明言し、保育原理の第一義を「自発性」の尊重に置いた時、表現に対する見解は子どもの内発的なエネルギーがどのような姿をもって顕れてくるか。また、その発達を見守り育てる手段について考察していくことに注がれる。

先生は学生を前にして、こう語る。

「生命は外面に現れるものである。

幼児の生命も、一つは単なる活動として表れ、他の一つとしては単なる活動としてではなくて、ある一つの表現をしようとするものである。

表現とは、その活動の結果が、ある形をそこに現してくることである。これも生命の一つの発露ではあるが、この表現活動の中にも、自分自身をもってする表現と、物に表し来る表現とがある。

自分をもってするにも、言葉でもってするドラマや・音楽・話・語らい等がある。内面的のものを現すためのものである。

表現とは、必ずしも人に伝えることのみしない。自分の中のものが外に出て、何かまとまりのあるものになりたい。人に伝える前に内面的なものが自分自身に判るのである。

ここに伝達と違った真の意味の満足がある。自分の芸が身にしてみても、たまたまなくなる。伝達の目的にあらざって、自分の身で満足しているのが幼児の自己への表現である。」

——講義録 一三四／一三五頁——

この説明の中に幼児の表現について、また芸術一般に対する深い洞察が含まれていると感じられる。

二、幼児の自己への満足

“自分の芸が身にしみて、たまらなくなる”という一見、見過ごされてしまうかもしれないこの独特なニュアンスをもつ短い言葉は「表現」というものについての本質をつく鋭い指摘を、短い言葉の中に凝縮して表している箇所であり非常に重要な意味を持っていると筆者は考える。

前述の言葉では、生命の発露としての幼児のエネルギーは多様な現れ方をするが、その一つが活動そのものであり、他には何らかの形をとる表現であるという。更にこれを言語や音楽的なものと、造形的なものとの二方向に分けている。

注目したいのは、子どもの湧き出る表現の奥に単なる訴えや伝達の手段ばかりでなく、他からは見えない内部感覚としての自己自身の満足があり、その動機の中に潜むある微妙な心の動きに触れている点である。

“自分の中のものが外に出て、何かまとまりのあるものになりたい。人に伝える前に内面的なものが自分自身にわかるのである”という喜びを

——自分の芸が

身にしみて

たまらなくなる——という言葉で置き換え、他者に対する伝達如何にかかわらず、幼児が自分そのものに向けて感じるものこそ真の意味の満足をもつものであると説く。

そして自己への表現はとりとめのないことであるから、自身の心の中にあるものを一度形に現し見て客観的行程を経た上で改めて自己満足を得る。「これは実物、必要に迫られてなすものでなく、美的なのである」と続けている。

三、子どもが感じる育つ嬉しさ

子どもの成長の初期（概ね二歳前後頃を中心）に音

楽のリズムに合わせて頭をふり体を動かし、幼い舞踏を盛んに演じる姿を見せることがある。また語彙が爆発的にふえる時期もあり、思いがけない言葉や、特異な才能を伺わせるような知能のひらめきをみせたりして大人を驚かせる。

そんな様々な成長は、他から矯正された動きではなく全く自発的に・動き・表し・繰り返し楽しんで活動する姿そのものである。

その楽しそうな得意げな様子は育ちを見つめ願っている者にも好ましく伝わり、思わず誉めたり励ましの声をかける。それに応えてまた子どもは、大人からみてあまり意味のないような動きながら「見て！見て！」と何度も繰り返し返す。この相互に行き交う喜びは両者にとってひとときの恵みでもある。

およそ子どもが自身で何か出来るようになることは嬉しく喜ばしいことであり、新しく獲得した行動の自由は身体の内部感覚そのものの喜びの放散を楽しみ、

可能になってきた諸活動を反復しながら自身で確かめ自在に試しているということでもあろう。

“育つ”ということは、外部的にも内部的にもより良い方向への指向性をもっているものであり、時には停滞や一時的な退行があったとしても、上昇と広がりをもって豊かに伸びていくことである。

この伸びていく力が行動として発揮される際に、先行する喜びの気持ちがあるのは、子どもが自分にとって、まさに“自分の芸が身にしてみても”いる感覚なのではないかと思われる。

いいかえれば子ども
の育ちゆく姿は、外か
らは見えないながら
種々の神経細胞が、ゆ
らゆらと揺れながら結
びつき、確かな結合を
達した時の“生きる”



喜びの感覚そのものなのかも知れない。

こうして幼児の表出。表現は、成長と発達に連れて可能になってくる範囲が広がり、経験の積み重ねや自由なイメージ、そして好奇心にひきずられて多方面に分岐し豊かになっていく。

幼児の場合は生理的・情動的な動きが主であり、表出と表現は分かち難い。だが幼稚園に在籍する三年間の発達には、まさに驚くべき変化の連続の時であり、表出から表現への脱皮でもある。

この分化の過程で味わわれる微妙な内部感覚としての喜びを、敏感に受け留めて、よい方向づけをしていく重要性を指摘した先生の鋭い感性と慧眼には改めて敬服の他はない。

四、幼稚園と保育五項目

さきに引用した文章は講義録のうち前半では保育の原理・原則を示し、後半その実際篇として「保育法案」(方法についての考え)を述べていく過程で、I、

保育項目・II、仕組みと解説をし、更に保育の内容と導き方について章を改めて詳しく説明している箇所にと当たる。

大正十五年に定められた幼稚園令施行規則中の当時の保育内容は保育五項目として

「遊戯・唱歌・観察・談話・手技等」であった。

「保育項目は、法案の根本となるべきものである。幼稚園においては、決して項目が主ではなくて、保育のための項目である。……昔においては、項目が幼稚園を支配するごとくに見えた。今日においては、項目を表立せずに、あくまで保育を主として幼稚園があるのである。」

現代保育の要点はここにある。」

——講義録 一四〇／一四一頁——

そして五項目を遊戯から順に説いていく事をせず、また「手技」を手技とせず自身の信念の下に「製作」という項目にして論じている。ここでは

「手技とは作ることであるが、この製作ということ

を、教育的に重んじてきたのは、フレーベルの幼稚園の一つの卓見である。……そして製作ということが卓見であるということは、古い教育が専ら受け取らせること、及び観念的なことに限られていたのに対し、生活を生み出すこと、観念よりも実体的なことに重きを置くところにある。……」

としながらも、製作が本来のフレーベルの意図から次第に抽象的・観念的になっていったこと。または「製作」が後継者によって「技巧的・練習的・分解的・繊細的」になり、作るということの生活的意義から離れたのみならず幼児の能力や神経系の発達に適合しないものになっていったことに言及する。

- (1) このような見地から子どもは現在の手技からは、本当の面白さを味わうことが出来ない。
- (2) 保育原理の一たる具体原理に逆らう事になる
- (3) 小さな部分の技巧は子どもにとって神経を疲れさせ、保育の本質と子どもの健全な発達にとつ

て望ましくない。

材料についても、紙・木・粘土を中心とした単素材の細工物に偏りがちであった幼稚園の実態に対し、

- (1) 作るという生活を尊重するためには、細かくというより大まかでもかまわないとする。
- (2) 細工の材料を限定する必要はない。すべての材料を混同して用いるがよい。」

現代においては当たり前と思われる、こうした主張でも一九三〇年代の幼稚園界では、かなり勇気のいる発言だったのかも知れない。

五、芸術的誘導と産業的誘導

幼児の製作を、生活的にするための方策として、彼らは子どもが自分から進んで作るようにしたいと強く考える。

そしてその動機を重視しながら、芸術的なものと産業的なものの二つの面から製作を進める方策を提案する。この方策は他の文献には全く示されていない語句でありこの講義録にのみ載っている独特なものであ

る。

以下その要約を記してみよう。

生活的誘導

1 芸術的誘導

(1) 子どもには、芸術的製作衝動というものがあ
る。子どもにこれが湧いてくるのを待っているの
である。そして、この機に応じれば、これこそ最
も純粹な芸術的誘導である。

(2) それには材料・道具を豊かに供することであ
る。人は製作衝動が内から湧くとはいうものの、
物に誘われてやるということのほうが多い。幼児
の生活の中に豊かに備えておけば自然にこの衝動
が起こるのである。

子め備えておくというのが幼稚園である。

(3) 製作を見せて誘導する。

a 製作されたものゝ子どもは、それを見て衝動

にかられる。

b 製作という生活を見せる。人が製作しつつあ
るところを子どもに見せる。

2 産業的誘導（目的的生活興味）

作るということが、その子どもの心の必要から生ま
れてくるもの。産業的製作は自己が感じた必要感のた
めにする。

例えば、人形がある時その人形に対して親しみを感
じて何か作ってやりたい気持ちが生じるとする。また
生活の中で経験しているものに結びついている玩具屋
・果物屋などを再現するといった目的性を帯びた製作
のことをいう。そして作ったものは、ただ見掛けだけ
の作品ではなく、製作の過程で楽しく作品を使って生
活の場で遊ぶことができなくては意味が無い。（産業
的製作については、細かく丁寧に説明を加え、この誘
導の教育全体に対する意義を述べた後）指導について
は次のような方法をとる。

A 子ども自身の有する目的的生活興味を、この製作において完成させてやる。

B 目的を出させるように誘導すること。

(1) その子の環境的影響によって、目的的になりかけているものを、はっきりした目的にまで誘導する。興味を目的に置きかえてやる。

(2) 子どもをして必要に遭遇せしめ、その必要感を誘導すること。

全部の子どもが同時に同じ目的をもっていると限らない。しかし何人が必要の切迫を感じると、それに動かされて知らず知らず必要感が発生してくる。―相互生活―

(3) 偶発的なものばかりでなく、ある程度手を入れておいて、後の充実、感性の必要を子どもに感じさせて作らせるということが出来る。

子どもが自身の思っている目標に近づきたいが、どうしても力不足の場合は「裏」からいっ

て満足を与えるようにする。子ども達に教えるというよりも、子どもの生活を心の届かないところまで到達させてやる知己（自分の心をよくしつてくれる人）でなければならぬ……。

このように講義録ではかなりの時間を割き、事細かに説明しながら、なぜ他の文献には全く登場してこないのか。その理由は今となってはその真意を知ることが出来ないが、おそらく当時の「手技」重視の現実から、幼稚園一般の観念をどう変えていったらよいかを模索する中で、一つの試案として出されてきたものではないかと思われる。

当時の東京女子高等師範学校付属幼稚園の主事であった立場から



日常の子どもと保育者を観察し、「私の研究は、考えつつ行いつつ、行いつつ考えつつ進められてきた。従って、いつでも同僚保母諸君の助けを借りている。借りたというよりも協同研究で歩いてきたと言った方がほんとうである」という『幼稚園保育法真諦』の言葉を出すまでもなく、幼児の生活を重視する中で、自己充実―充実指導―誘導―教導の保育を提唱し、特に初版には載せられ後に割愛された『誘導保育の試み』の実践例。そして、『系統的保育案』に示された内容との関連を考察する際には欠かせないものである。

講義では次に「観察」が取り上げられ、項目として幼稚園令に新たに加わった理由が説明されている。他の遊戯・唱歌・談話・手技等が生活上の姿であり、形であり、体を成しているのに対し、観察はいつ・いかなる場所においても行われている△動き▽を表している名称であり、単に知識的・観念的な教育をするので

はなく、物に則し事実には正確な興味を向けさせる態度を養う教育のために生まれたものであるとしている。

さらに「談話」「遊戯―唱歌」と続き、「談話」ではⅠ、ConversationとⅡ、Storytellingの意味に触れ、「おはなし」をしてもらう楽しい子ども心の作用をA、表現活動・B、想像活動の二面から捉え、「子どもは自らの心の中に持っているものを話し手によって表現してもらい愉快を味わう。心の中に表現しよう・外に表そうとしているものがあるが、印象も薄く術も無いのを先生が表現してくれると、願っていたものが表現されて満足感を得ることが出来る。」……と、子どもの心もちへの接近と、保育は味わわれるものでなければならぬことをここでも重ねて説いている。

つづく

(洗足学園短期大学)